校園長室から

学校教育目標

共に学び共に伸びる子ども

・いのちを大切にできる子ども　・だれとでも仲良く協力し合う子ども
・意欲をもち学習する子ども　・ねばり強くはたらく子ども

令和６年７月５日　第12号

読了

７月２日の朝、自転車で校区を回っているとき、臨海線の方から蝉の声が飛んできました。今年の初蝉。まだ学校では聞かれませんが、プールも始まり本格的な夏の到来です。

ところで、令和６年も折り返し。今年のお正月に世界一長い小説のひとつと言われている、山岡荘八著『徳川家康』全26巻を読み切ると計画を立てました。

そもそも30年ほど前に亡くなった父親から譲り受けた本です。

途中22巻と25巻が行方不明なのが分かり、近所の図書館の協力も得ながら読み進めました。

昭和の中頃の出版物です。ページを掌(てのひら)で撫でますと、一つ一つの文字の凸凹を感じます。活字で組まれたものだから。「活字」とは、一つ一つの文字のハンコと言えばイメージできますか。

本の最後には「検印」と言って、出版していいですよというハンコが押されています。当時は検閲制度があったのですね。

さて、この24冊の本ですが読んでいる途中で、かつて父親が読んでいた時に迷い込んだ蚊や小さな虫がページに付いていたりします。昭和30年代の本ですので、その虫たちは、50年以上本に挟まれていたことになります。汚れた手で触ったのでしょうか、亡き父の指紋が浮かんでいたり、父のものと思われる鼻毛や髪の毛が挟まれていたり。

ところで、最初のころは、色んな書き込みがあったりしたのですが20巻を超えると、書き込みも虫も毛も指紋も出てこない。

「お父さん、本当に最後まで読んだ？」と聞きたくなりました。